



福島県

佐藤 信一さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：2月25日

私にとって「浪江」は、大人になってからの人生の半分です



▲『浪江小学校物語』では語り尽くせなかったお話もたくさんしてくださいました。第69号(平成29年3月号)に掲載された横山和佳奈さん(当時6年生)は、その時の教え子のお一人だそうです。

佐藤信一さんは、現在、兼務校である福島市立岡山小学校に勤務されています(本務校は浪江町荻野小学校)。岡山小は在校生が407名で、浪江町のスクールバスで6名の児童(うち3名はこの春卒業)が通っています。震災直後は市内の各学校にスクールバスなどで多くの児童が通学していましたが、徐々にその人数も減っているそうです。

震災当時は、東京のNPO法人が制作した紙芝居『請戸小学校物語-大平山をこえて』で広く知られるようになった請戸小学校で教務主任をされており、折りに触れて避難の様子を詳細に伝えてこられました。今回の取材も、当時のお話からお伺いしました。

◆あの時に6年生だった子どもたちが、今、請戸を語り継いでくれています
まさに、あの日は『請戸小学校物語』そのものでしたね。卒業式準備のため、体育館には5年生がいて、「しやがめ!動くな!」と指示を出して体育館の出口を開けに行きましたが、2分間くらい扉ごと左右に大きく振られました。揺れが収まり、教頭先生から避難を告げられ、既に下校していた1年生を除く、2年生と6年生までが校庭に集合しました。私は、取り残された子どもがいなか確認するために校舎の2階に行った時、海を見ましたが、何も変わった様子はありませんでした。
6年生を先頭に大平山に移動し始めましたが、浜街道は大渋滞。駆けつけた保護者の方々は、学校として全員避難を了承いただき、子どもたちを順番に横断させながら、田んぼのあぜ

道を進みました。最後尾にいた私は、山を登り始めて直ぐに津波らしい音を聞き始めましたが、夢中で山を登っていた子どもたちにはおそらく解らなかったと思います。
私は大平山の避難場所を確認するために一度下山しましたが、辺りは津波の痕跡がもう酷い状況でした。全員で6号線側に下山し、私はバスの手配をお願いするために役場に向かっていたのですが、偶然通りかかったパトカーに伝言をお願いすることができました。子どもたちと先生方は、同じ場所に避難していた地域の人たちと共に、紙芝居にもあるように通りかかった運送会社のトラックに乗せてもらい、役場で保護者たちと合流することができました。私も、戻る途中でトラックに乗せてもらいました。
子どもたち全員が無事だった最も大きな要因は、避難のタイミングや選択が全て合っていたことによるかと思っています。日頃から地元、請戸の人たちの学校に対する理解や協力、災害発生当時の先生方の冷静な判断や周りの人たちの支えなど、本当に多くの人に助けられた命だと感じています。

◆これから先、何が出来て、どう進むか、思案中です
私の自宅は役場のすぐ近くでしたが、家族との連絡は取れませんでした。翌朝、玄関の張り紙を見た妻と合流でき、相馬の実家に2日間避難しました。原発事故後に福島市のあづま総合体育館に行きましたが、犬がいたので車で寝泊まりしました。その後、会津若松市の県立会津学鳳高校へ。当初は、高校の先生方が運営する避難所でしたが、避難者で自治会組織を結成し、支援物資の配給などを行いました。
3月下旬には相馬に戻ったのですが、浪江町教育委員会から招集があり、福島市内の小学校に兼務辞令が出て勤務することになりました。現在もここで妻と暮らしていますが、浜っ子なので、暮らすならば海の見えるところがいいですね。
浪江町は4月から帰還が始まりますが、子どもたちが戻れる環境にならないと、保護者の方々は帰ろうとする状況にはならないでしょうから、町内の学校がどうなるか大変気になります。
私の教師生活もあと10年ほどですが、出来ることなら最後は浪江で迎えたいと思っています。

浪江のこころ通信

・第71号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除く区域で解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この「浪江のこころプロジェクト」は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第71号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





三瓶 春江さん(南津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：3月10日

「津島しだれざくらの家の枝垂桜の下、 家族みんなでピクニック」が夢です



▲「子どもたちに頼りにしてもらっているうちは、母としてできることは何でもしてやりたい」とおっしゃる春江さんは、本当に明るい「おかあさん」。家族への思いは尽きることがないようです。

浪江町津島で石材加工業「スガタ彫刻」を営む夫を手伝いながら、家事や内職に忙しい日々を送っていらっしゃる三瓶さん。

現在、家業は福島市郊外のご自宅から近い所に仕事場を構え、ご主人と長女の夫、次女の3人で頑張っているらしいそうです。お家は、ご夫妻と夫の両親、長女夫婦と孫3人、次女の10人が同居する大所帯。長男夫婦も近所にお住まいとのことで、「家族12人全員で週末、食卓を囲めることが一番の幸せ」とおっしゃいます。

◆避難には、家族のドラマがたくさんありました
震災が起きた時、長女夫婦は留守でしたが、私や夫の両親は家にいました。車が大きく揺れて、石材も壊れました。家の中は滅茶苦茶で、屋根のぐしも殆ど崩れました。余震も酷かったけれど、幸い家族に怪我はありませんでした。
私は津島保育所にいる上の孫が気になって駆けつけると、子どもたちは薄着のまま園庭に避難したようで、とても寒そうでした。孫を連れて、6キロほど離れた実家の母の様子を見に行きました。独りで駐車場にいた母は、どんなに心細かったでしょう。
母を連れて自宅に戻り、余震が収まるまで車に待機した後、家の片付けをしました。とはいえ、家族が座れるよう、

◆家族が一緒に住める家を探し続けて
平成23年3月下旬には津島に一時帰宅をしたり、二本松市の親戚の空き家を下見するなど、

茶の間のスペースを確保したただけでしたが、夜になっても余震は続き、全員が茶の間で過ごしました。
翌12日は、自宅と会社の片付けをしていました。区長さんから「町から多くの人たちが避難して来るので、炊き出しを手伝ってほしい」と言われ、近所の人たちや娘たちと一緒におにぎりを作りました。家の下に南津島の上集会所があり、中下グラウンドは避難して来た人たちの車でいっぱいでした。
14日には3号機が爆発したことをテレビで知って、小さい孫たちを連れて遠くへ逃げようということになり、東京に住む夫の妹を頼りました。深夜に出発し、15日の夕方ようやく着いたのですが、埼玉県越谷市のガソリンスタンドで受けた親切は今でも忘れられません。既に給油量の制限があったにもかかわらず、「満タンに入れていいよ」と言ってくれたのでした。今でも本当に感謝しています。

津島には、今住むことができません。きちんと除染や土地改良をして、いつでも訪ねて一日過ごせるような状態にして欲しい。行ったり来たりになっても、伝統芸能や盆踊り、運動会などを楽しめるといいですね。思い出がそこにあるんです。故郷を忘れずに済みますし、子どもたちにも孫たちにとっても津島が生き続けると思っています。



横山 悟さん(棚塩)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：2月28日

商いを通じて、浪江町とつながっていたい



▲ご自慢の「磐城壽」と「大堀相馬焼」を前にして。
鈴木酒造店の「ゴールデンランバ」は、3.11に合わせて昨年から造られているお酒で、お店では当時を思い起こしながら「献杯」をしているそうです。

横山さんは、福島市内の繁華街、パセオ通りで『やきとり 土竜』を営んでいらっしゃいます。この震災で一度は諦めた将来の夢でしたが、「やっぱり自分で飲食店をやりたい」という強い思いから、平成25年2月、福島市内にある飲食店のチャレンジショップ「屋台村」にて創業しました。今に至るまでには、さまざまなご苦労があったと思いますが、平成27年7月に現在の場所に移転。本格的にオープンし、今年で丸2年を迎えるお店は順調とのことです。

◆料理人から会社勤めを経て、一念発起。チャレンジしました
3月11日は勤めていた会社の中で地震に遭いました。「何が起きたんだ？」という記憶しかないですね。自宅には戻れず、原発事故の恐怖から「とにかく遠くへ」と、福島市で両親や弟妹と合流して、知人を頼って新潟県柏崎市へ避難しました。あの時は、ガソリンも手に入らず、僅かな燃料で必死に雪道を走ったことを覚えています。
何とか柏崎に到着し、知人宅に一泊しましたが、次の日から柏崎市立体育館で避難生活が始まりました。柏崎の方々は中越地震を経験していたため、地震直後、迅速な受入態勢をとって来ていて、私たち避難者を温

もぐら
やきとり 土竜
福島市万世町5-5 相良ビル2階
☎024(573)9555
営業時間：17時30分～24時
定休日：毎週日曜日、第1・第3月曜日

◆故郷の良さを、私なりに伝えたい
私の店のコンセプトは、素材にこだわった会津地鶏の本格焼

かく迎え入れてくださいました。炊き出しや、励ましの言葉をいただいたことを、今でも本当に感謝しています。
柏崎市立体育館から市が用意してくれた旅館に移り、1、2か月後に市が提供してくれた住宅で過ごしました。
新潟で約1年の避難生活を送った後、平成24年3月、生活基盤を福島市にと決めて、単身で戻りました。1年ほど会社員として過ごしましたが、自分らしい生き方をしたいと思い、起業を決断しました。カウンタ8席の小さな「屋台村」の店からのスタートでしたが、さまざまな人や同じ志を持つ仲間と出会い、そこには勤め人とは違った新しい世界があり、同時に「商い」を学ばせていただきました。

浪江町の良さや頑張っている人々がいることを、この飲食業の仕事を通じて伝えていくことではないかと思っています。故郷を離れて6年が経ちましたが、遠くからでも浪江町と細く長くつながっていきたいと思います。

き鳥と、地酒をゆつくりと楽しんでいただく「大人の焼き鳥店」。そして、もう一つは「浪江の良さを知ってもらおうこと」。震災前は身近過ぎた鈴木酒造店さんの「磐城寿」や、歴史ある大堀相馬焼が、震災を機に、改めて良いものだと気付き、浪江町の伝統的な文化にも触れて喜んで欲しいと思いました。
お客さまの約9割が福島市内の方で、大堀相馬焼はどこで作られているのか、或いは「磐城寿」の蔵元が山形県長井市にあることは知っていても、元々浪江のお酒だとは知らない方々も結構いらっしゃいます。「美味しいね、どこのお酒なの？」とか、「この酒器は二重構造で珍しいね」などと興味を持ってくださいます。また、偶然に浪江の方が来られることがあります。が、「大堀相馬焼で寿を飲めるなんて懐かしいね」と言ってくださることが嬉しいんです。